

「産みの苦しみの始まり」(2024. 8. 18)

民は民に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に飢饉や地震が起こる。

しかし、これらはすべて産みの苦しみの始まりである。(マタイ 24 : 7-8)

8月4日の平和聖日、私たちは「連禱(リタニー)」によって平和の祈りを捧げました。私は毎日ウクライナの状況を見つめ続けています。停戦が一番いいのですが、問題はどのような状態で停戦か、ということです。ウクライナは侵略され、多大な犠牲を出しています。簡単に譲歩できないし、ロシアもおびただしい人的・物的損失を出しています。悲しいことですが、もう戦場で決着付けるしかない、そんな気分になります。イスラエルとハマスの戦いもそうです。だが、イスラエルは神が「地上の氏族はすべてあなたによって祝福に入る」(創世記 12:3)と約束されたアブラハムの子孫です。他民族・他国の祝福の源、祭司の国として立って欲しいと祈ります。

広島は原爆が投下されて79回目の8月6日を迎えました。湯崎知事の挨拶に心揺さぶられました。「いわゆる現実主義者は、だからこそ、力には力を、と言う。核兵器には、核兵器を。しかし、そこでは、もう一つの現実は意図的に無視されています。人類が発明してかつて使われなかった兵器はない。・・・核兵器も、それが存在する限り必ずいつか再び使われることになるでしょう。私たちは、真の現実主義者にならなければなりません。」このように語り、昨年投資された核兵器維持増強の資金の十分の一の1.4兆円や数千人の専門家を投入すれば、核廃絶も具体的に大きく前進するでしょうと提案します。そして、手の火傷をした沖縄の研究者の述懐を紹介しながら、「誰だか分からないほど顔が火ぶくれしたり、目玉や腸が飛び出したままさ迷ったりした被爆者の痛みを、私たちは本当に自分の指のひどい火傷と重ね合わせることができているのでしょうか。」と問いかけます。そして、最後に「『過ちは繰り返しませぬから』という誓いを、私たちは今一度思い起こすべきではないでしょうか。」と結びました。



私の心は揺れます。「いわゆる現実主義者」と「真の現実主義者」の間を。しかし、我が国は廃墟の中から悲壮なる誓いに導かれたのです。この誓いを思い起こし、上掲の御言葉に励まされて、「真の現実主義者」として諦めずに平和のために祈り続けたい。